

5 歴史からみる文系と理系 ～変わるもの、変わらないもの～



隠岐 さや香
OKI Sayaka

東京大学大学院教育学研究科／教授

自然発生的に定まったものではなく、人為的な判断や社会制度の中で形成されてきた文系と理系の境界はゆらいでいるのだろうか。教育制度と学問分類という二つの視点から、時代の推移の中で変わってきた側面と維持されてきた側面を明らかにする。

教育システムの文理と学問分類の文理

文系と理系の境界について考えてみたい。それはゆらいでいるのか。この問いに答えるのはなかなか難しい。そもそも「文系・理系」が何であるのかを解きほぐして考えてみる必要があるからだ。私が理解するかぎり、少なくとも二つのことを意識しなければならない。

第一に、中等教育（主に高校）までのコース分けとしての「文系・理系」がある。これはおおそ高等教育への進学資格問題、すなわち大学受験に関わる問題であり、国ごとに大きく事情が異なる。それでいて10代の多感な時期に適応を迫られるので、個人のアイデンティティ形成や価値観に影響が出る。結果、「私は文系だと思うが、親に勧められて大学では工学部で建築を学んだ」とような語りをする個人が出てくる。対して、英米のようにこの種のコース分けをしていない場合や、あるいは別の違うコース分けをしている場合（例えばフランスの進学校には文学、社会経済、科学の3コースを設ける所がある）、若者における「私は文系／理系」のような自己認識は薄くなる。

第二として、学問分類から見た「文系・理系」がある。これはそのまま大学における「人文社会科学」と「自然科学・工学」の対比と呼び変えて差し支えない。この区分は「人間社会を扱う諸分野」と「物質的な自然を扱う諸分野」の対比である。しかもこれは日本だけの話ではない。例えば、英語圏では

「STEM」(自然科学・工学・エンジニアリング・数学)と「STEM以外」のような表現がある。このように学問分野を二つに分ける考え方は、実は世界的に共有されている。ただし、人文社会科学／自然科学・工学と分ける場合、人体を扱う医学の立場は曖昧になるし、数学も一部の人文社会科学分野(経済学や社会学など)で使われることにより立ち位置が曖昧になる。

このように、中等教育の文理コース分けと、学問分類における文理とでは違う境界線が採用されている。

冒頭で述べた「文系と理系の境界はゆらいでいるか」という問いに対しても、この二つの文理は違う答えを返す。まず、高校の文理コース分けは一国の教育政策の枠で変えられる問題であり、いわば常に「ゆらいでいる」といえる。それに対し、学問分類としての文理は事情が違う。それは数世紀をかけて発展し、世界的に共有された知の体系であるので、変化はより緩やかである。もちろん、環境学や情報学のように新しい複合領域が人文社会科学と自然科学・工学の境界上に生まれている事実はある。だが、そのことにより両者の境界自体が大きくゆらいでいるかという、実はそうでもない。

要するに「文系・理系」の問題においては、境界線が時代や地域によってゆれ動く部分と、容易には変化が難しい部分とが入り交じっている。そして、「人間社会」を対象とする学と「自然・モノ」を対象

とする学を分ける発想自体は意外と強固である。そう考える理由を以下で述べる。

学問分類における「安定性」と人間知性の構造

自然界に関する学問を他と区別する発想は古代から存在する。例えば、紀元前四世紀にプラトンは、師のソクラテスが若い頃には「自然についての探求」に熱心であったと述べており、それ以外の知的関心と区別している(『パイドン』第45節)。また、自然科学という分類はアリストテレスにも見られる(図1、2)。同様の分類は西洋世界に受け継がれ、18世紀フランスのディドロ、ダランベールらが編集した巨大事典『百科全書』の学問分類表でも、「自然の学」と「人間の学」という区分が明確に見られる(ただし、「神の学」もある)。一世紀前の哲学者、F. ベーコンの分類も同様である(図3、4)。とはいえ、これだけだとヨーロッパ世界が特殊である可能性も捨てきれない。

だが最近、興味深い研究が現れた。2025年にフランスの認知科学者、ダンピエールとメルシエらが行った研究によると、地域と時代を問わず、学者の知的好奇心のパターンは「人間」「自然」「抽象」の3領域に分類されるという。「人間」は哲学、神学、歴史など、人間や社会および倫理規範に関する領域である。「自然」は動物学、植物学、地理学など自然界の物質的対象を観察・分類する領域である。そして「抽象」は、数学、天文学、音楽理論といった、数理的あるいは形而上学的(すなわち非物質的)な対象を扱う領域に相当する。しかも、各領域に関心を持つ人の比率がどの時代、地域でもそれぞれ3割程

度に収まり、大きく偏ることがないらしい(<https://doi.org/10.1007/s11192-025-05340-z>)。

この研究では自然な好奇心のあり方を捉えるため、敢えて近代的な教育制度が発展していない時代、すなわち1700年より前に生きた約13,556人の学者の傾向を調べている。それ故に、時代を超えて変わらない人間知性の構造が存在するのかもしれないと思わされる。

もちろん、この研究にも限界がある。例えば当時、学問の扱いをされていなかった工学に関心を持った人は対象となっていない。また、女性の占める割合

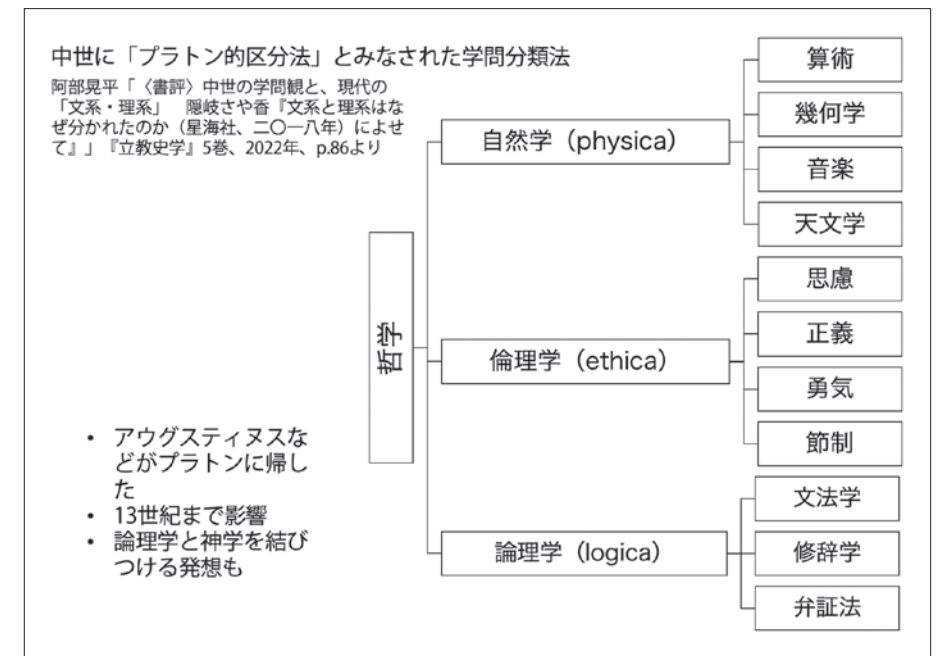


図1 中世にプラトンのとされた分類。「自然」が他と区別されている

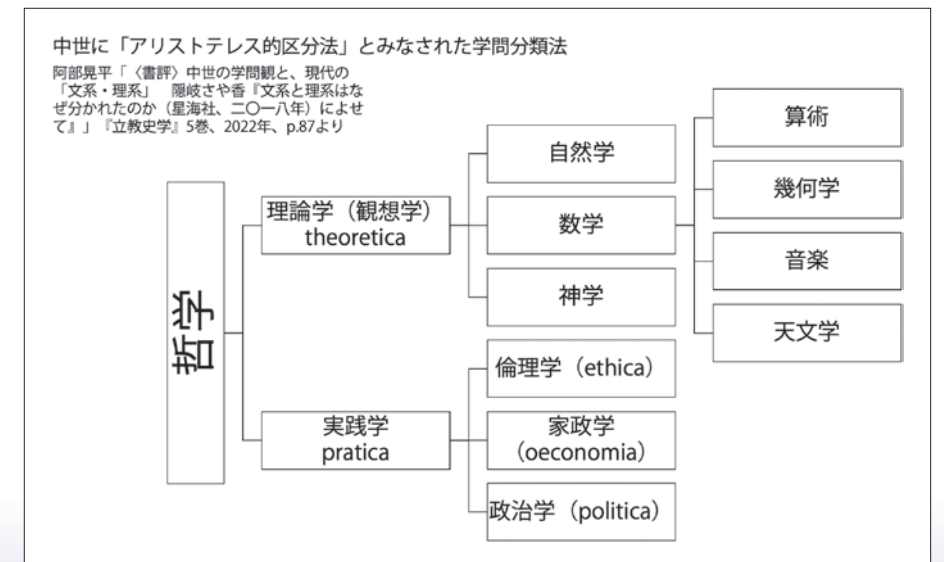


図2 中世にアリストテレス的とされた分類。「自然」が他と区別されている

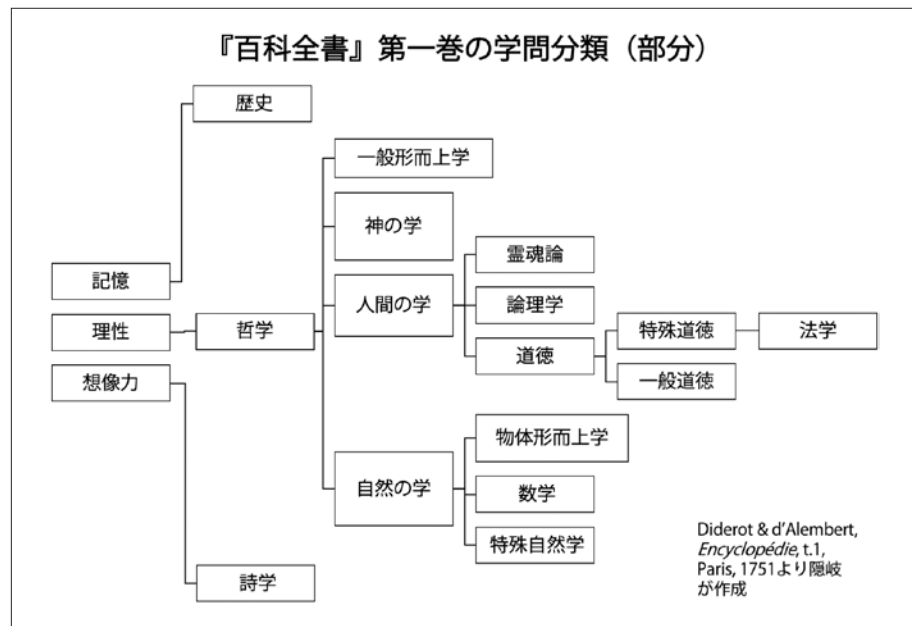


図3 ディドロ、ダランベール編『百科全書』（1751年）第一巻に収録された「人間知識の体系図」の日本語訳概要

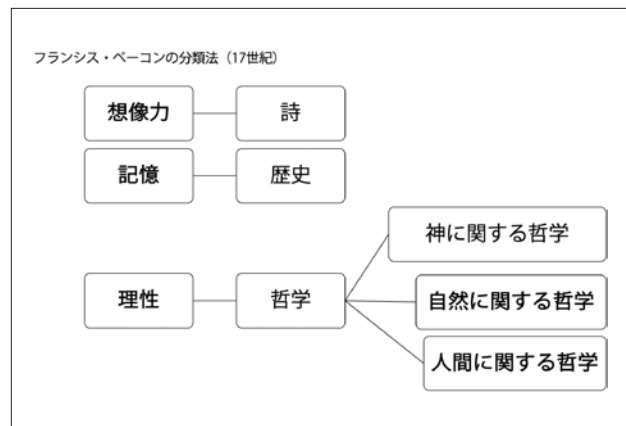


図4 フランス・ベーコンの学問分類の要点。「自然」と「人間」が分かれている

は144人と少ないので、彼女たちの知的好奇心は充分に反映されていないし、全体として西洋にデータが偏っている。

だが、この研究を踏まえると、人には関心の向き不向きがあり、一定の領域に関心を持つ人を人為的に増やすことは難しそうだとの推測が成り立つ。違うタイプの人々が各々の好奇心のままに知的探究を続けて、多様な分野を発展させた結果が今の学問のあり方なのではないか（図5）。

教育の変遷と地域的多様性

このように長い期間で発展する学問分類の歴史に比べると、高校の文理コース教育のあり方などは、全体として変化が速く、国ごとの事情もまちまちである。

例えば19世紀後半のドイツでは、中等教育において「ラテン語をしっかりと教え込まれるエリート男子教育」としての「人文教育」と、「ラテン語は減らして理科教育を厚くする実業系男子教育」としての「実科教育」の対立があり、両者は通う学校も違った。フランスでは19世紀半ばに、エリート層男子の中等教育で一時的に文理分けが生じたが、定着しなかった。

日本の中等教育で、なぜかにも強固に文理分けが定着したのかについては、実はまだよく分かっていない。そもそ

も「文科」と「理科」という言葉の由来も、英語およびフランス語のLetters/Scienceにあたる表現の翻訳語が由来だろうというくらいしか分らない。ただ、1918年になると、旧制高校の制度を定めた高等学校令で「文科」と「理科」のあり方を科目の種類まで規定している。これが現代の文理分けと内容がよく似ており、しかも同じ考え方が日本と関わりの深い中国や韓国にも共有されている。戦後になると、日本では文理を規定する法的な縛りは消えたが、大学受験の激化とともに文理分けは普及していった。中国、韓国でも同様だったようだ。

近年の動向に思うこと

近年気になるのは、その中国や韓国で文理分けを弱めるような大学入試改革が進んでいることだ。その背景にあるのは、気候変動や格差拡大、情報技術環境の変化といった社会課題への対応が可能な人材育成への関心である。詳細はここでは触れることはできないが、共通試験で文理双方の科目を受験させる方向に向かっているのは間違いない。

日本の場合はまだ受験改革の議論は本格化していない。朝日新聞と河合塾が2025年に行った調査では、高校の7割ほどが文理分けをしており、高校教員の側には大学受験対策のためにその維持を求める意見が多かった。しかし、その元凶ともいえる大学側には、むしろ文理分けへの反対意見が目立つ

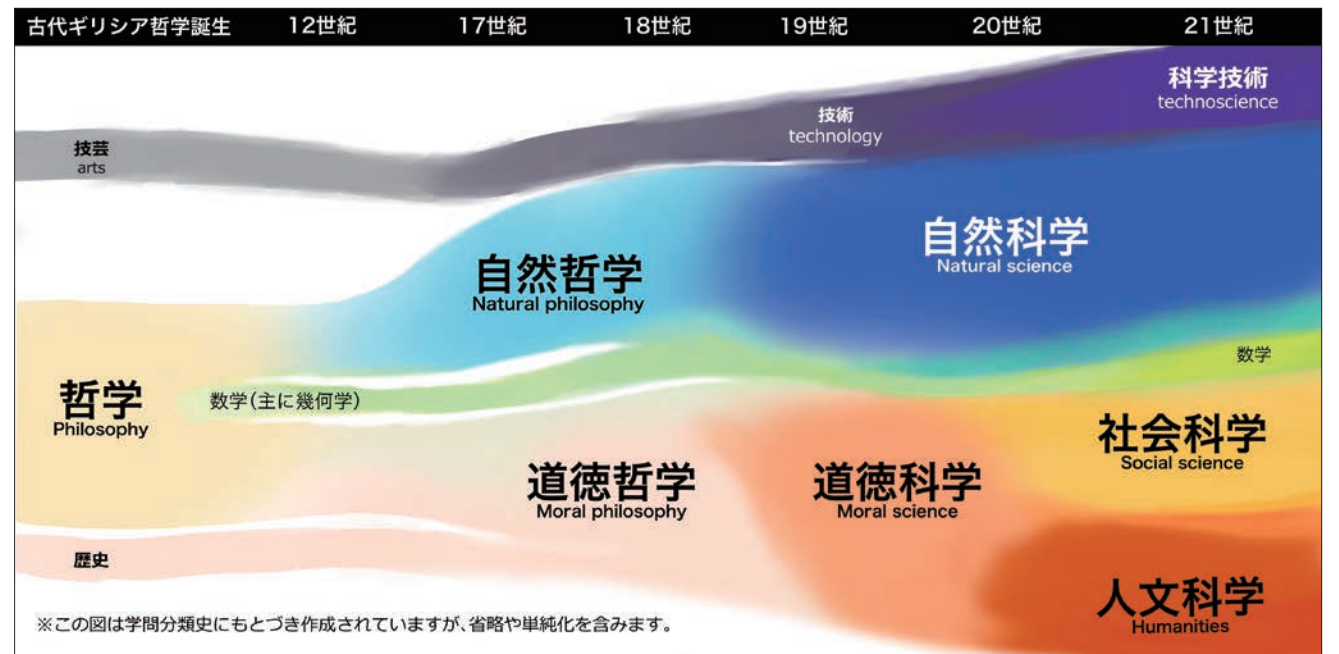


図5 諸科学領域発展の年譜（概要）

(<https://www.keinet.ne.jp/teacher/report/kjreport/25/pdf/20251201.pdf>)。

個人的に思うのは二つのことである。恐らく今後、大学受験のあり方は日本でも変わっていくのだろう。そうすれば、高校の文理分けもそれに合わせて消えていく可能性はある。その結果、18歳の受験で「自分は文系／理系だ」と思い込み、関心を狭めてしまう「文理のアイデンティティ化」は和らぐかもしれないと思う。

対して、学問のあり方そのものが短期間で大きく変わるとはあまり思えない。無論、多少分野の呼び名が変わる可能性はある。例えば、19世紀前半で「道徳科学」と呼ばれていた学問領域が20世紀には「社会科学」に変わったように。だが、人間の知的好奇心の構造が一定している限り、名前は変わっても似たような学問の諸分野が生成し続けるのではないか。

敢えて過去とは異なる要素を挙げるとしたら、それはこの私を含め、昔なら大学に行けなかった層が数多く学問に参入している点である。かつて身分の低かったエンジニアもその例であり、彼らの参画が工学を生んだ。今世紀には世界中で、女性や障害者、低所得層を含め、多様な人々が学問に参入している（図6）。これらの人々が、過去にはなかった学問分野の支流を作る可能性は残っている。

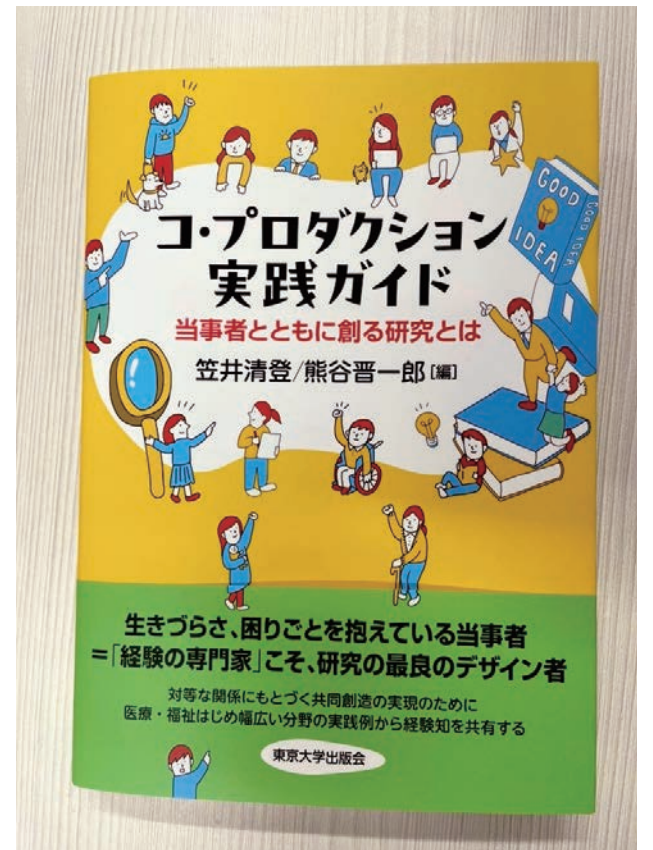


図6 筆者も寄稿した笠井清登・熊谷晋一郎編『コ・プロダクション実践ガイド 当事者とともに創る研究とは』東京大学出版会、2025年の表紙。障害、ジェンダー、エスニシティなど固有の背景を持つ当事者市民が参画する研究とイノベーションについて考えるための本